主題：顕微鏡　歯科衛生士が伝えたいこと
副題：拡大することで基礎を振り返る

医療法人こたけ会
武井歯科クリニック（群馬県・高崎市）
歯科衛生士　上田こころ

2002 年 4 月、私は初めてマイクロスコープに出会った。歯科衛生士になって、2 年目の春である。日常の臨床もまだ新米の私にマイクロスコープは光り輝いて映る一方、自分自身にとっては遠い存在だと感じたことを今でも鮮明に思い出す。

当院ではユニット７台中、５台にマイクロスコープを設置しており、大変恵まれた環境に私はいた。毎日の診療にマイクロスコープがあり、日常の臨床を覚えるのと同じようにその環境にも徐々に慣れていった。しかし、マイクロスコープがあるからといって必ずしも技術が向上するわけではない。歯科衛生士にとって感覚や経験は必要不可欠だ。研ぎ澄まされた感覚、積み重ねてきた臨床は私たちにとって、最大の武器になるだろう。

しかしながら、毎日の臨床を行っていく上で基本が疎かになったり、正しいことが分からなくなることはないだろうか？結婚などで先輩衛生士が退職していく中、私には基礎的なことを１から指導してくださったフリーランスの大先輩がいた。その先輩から教わった大切なこととは、“基礎が無ければ応用もない”ということだ。基礎が大切なことは周知の事実だが、同じ仕事を続けていく中で、基礎から外れてないかどうかを確かめる機会や、振り返る時間が日常、どれほどあるだろうか？毎日の多忙な臨床に追われ、省略してしまうこともあるだろうし、自己流になってしまうこともある。逆に患者さんを思うあまり、やりすぎてしまうこともあるだろう。本を読み、様々なセミナーに参加して知識を得ても、その通りにできているのか不安に思う歯科衛生士さんは沢山いることだろう。私もそのうちの一人だった。そんな悩める私に「プロフェッショナルな仕事ということで使用する前に、マイクロスコープを使って自分の目で確かめろ」と教えてくれたのは、当院の院長だ。患者さんのためのみならず、マイクロスコープは私たちにとってどのような存在なのか、歯科衛生士の立場から伝えたいと思う。